

2017年

6月10日

第303号

ゆうあい通信

発行所 石井記念友愛園

宮崎県児湯郡木城町椎木 644 番地

〒884-0102 Tel 0983-32-2025

新たな時代へ

園長 児嶋草次郎

宮崎は、6月6日に突然梅雨がやって来ました。平年より6日ほど遅いとか。待ちきれずに咲き始めていたアジサイも、天気が続いて日中ヨレヨレだったのに、水を得て元気に輝いています。これから梅雨が明けるまで、白・青・ピンク・紫等雨に打たれながらもそれぞれにしっかり天に向かって花を開き、うっとうしい毎日でマイナス思考におちいりがちの子供たちを鼓舞してくれます。そう言えばもう一つの花、カンナも、園内のあちこちで、今年も赤・ピンク・黄色等の花々を、これも勢い良く鮮やかに開花させ始めています。雨にも負けず夏の暑さにも負けず、晩秋霜が下りるまで咲き続け、子供たちを励まし続けてくれます。

さて、今月は、5月中に行われた乳児院「石井記念仁愛の家」と保育所「石井記念尾鈴保育園」の落成式での挨拶（要旨）と、石井十次の会の会員だった松岡重文氏の葬儀でのお別れの言葉（弔辞）を掲載させていただきます。前二件については、スタートにあたり職員や支援者の皆様とその決意を共有したいという思いがありますし、後者については、松岡重文氏のこの20年間の石井十次の会の一会員としてのボランティア活動に、敬意と感謝を表しておきたいという強い思いもあります。

「石井記念仁愛の家」落成にあたって

この度、乳児院「石井記念仁愛の家」を、都城市石井記念有隣園内に新たに開設することができました。国・県を初め、県議会それに関係の皆様のお支援、御指導のおかげであります。まづもって感謝申し上げます。

今、子供の貧困、貧困の連鎖が大きな社会問題となって来ております。国や地方行政も、その対策に乗り出して来ております。社会的養護問題につきましても、宮崎県におきましては、家庭的養護推進計画が作成され、平成27年からその実施に向けてスタートしております。

昨年度開設しました高原町の児童養護施設「石井記念神武の家」も今回の乳児

院も、国・県の推進計画にもとづいた設置ということになります。さらに、この乳児院に付置する施設として、児童家庭支援センターの今年中の設置もほぼ決まり、今後準備を進めてまいります。

なぜこのようにバタバタと施設整備をする必要があったのか、3点にしばり説明させていただきます。

① 国の方針施設の「地域分散化」にともなう施設整備であります。宮崎県の場合、社会的養護の施設は偏在化していました。県南県西地域には石井記念有隣園一つしかなく、とても子供の、最善の利益を保障する体制ではありませんでした。改善に向けてこの数年県に働きかけてまいりましたが、一挙に改善された形となっております。県当局の積極的な姿勢に感謝申し上げます。

② 宮崎県が昨年度宮崎市内に児童家庭支援センターの設置を実現できたことは、画期的なことでもあります。石井記念友愛社では、平成18年に小規模児童養護施設を作った時、その2階に設置する計画でありましたが、なかなか実現できないままに10年が過ぎておりました。

宮崎県の推進計画では、乳児院内に児童家庭支援センターを設置し、里親推進を積極的にやろうということになっており、昨年度、宮崎市内のカリタスの園乳児院に設置されたのであります。石井記念友愛社もぜひ参画したいという思いで応募したわけでありまして。この度の児童福祉法改正で明記されておりますが、社会的養護児童を保護する場合、まず家庭養育（里親）を優先順位の第一位とする。これは世界の流れであり、私達施設養護に従事する者としてもこの分野で貢献したい、そういう思いであります。これからは、乳児院が里親推進の拠点施設になっていくのであります。この里親推進の考え方は、石井十次の最終的な構想でもありました。

③ 私達がこの事業に取り組んだもう一つの理由があります。「子供の貧困」の多くは、一人の女性が妊娠をした段階から始まる、だから子供支援は、一人の女性の妊娠した時点からはじまらなければならないという考え方を、私達は持ち始めたのであります。

ついこの前、熊本の「こうとりのゆりかご（赤ちゃんポスト）」が開設10年ということでマスコミで取り上げられておりました。賛否両論あるようですが、母子支援は、本来、里親推進以前にもっと力を入れるべき問題でもあります。

その支援の土壌としては、やはり、「要保護児童地域対策協議会」であり、たて割りではなく、この包括的なこれらの横の連携をいかに充実強化していくのかという課題を突き付けられることとなります。

私達社会的養護に生きる者も、これからはアウトリーチに挑戦していかねばな

らないわけです。これも世界の流れです。そのための拠点として乳児院があり付属の児童家庭支援センターが必要なのです。

「石井記念尾鈴保育園」落成にあたって

この度は、石井記念尾鈴保育園をようやく改築することができました。国・県そして都農町、町議会、さらに関係の皆様のご支援、御指導のおかげであります。まずもって感謝申し上げます。

この石井記念尾鈴保育園は、平成23年度より都農町立保育園を民間移譲でお引き受けし、名前を変えて再スタートした保育園であります。建物が非常に老朽化しておりまして、一日でも早く改善を必要とする園舎でありました。南海トラフの大地震が来たら一ぺんにつぶれるような建物構造で、心配しておりました。これでようやく子供たちの安心、安全を守れるようになりました。改築するのに6年もかかりましたが、土地を提供して下さった方々、間に入って色々とお支援くださった方々、そして心広く受け入れてくださったこの地域の方々にも、感謝申し上げます。

さて、建物はできましたが、この建物にいかにか魂を入れるかが、つまり石井記念友愛社の理念・方針を吹き込んでいくかが、今後の私達の課題であります。そして、この保育園を利用する子供たちにとって、最高の保育環境となるように努力してまいります。

まず、石井記念友愛社の理念ですが、「天は父なり 人は同胞なれば 互いに相信じ 相愛すべきこと」という石井十次の言葉を掲げております。西郷隆盛の「敬天愛人」にも重なるすばらしい言葉でありますして、この言葉を理念として掲げることができることを誇りとしております。

具体的にはどういうことか。4つの方針にそって説明させていただきます。

まず「自然主義」。この天・大自然を父のように畏れ敬い、共生し合っていくこと。そして、そういう姿勢が人間として大切なのだという感性を子供たちの心の中に育てていくことが必要であります。

保育園の用地として、自然環境に恵まれているということを選定条件の第1位としましたが、基本的には最高の場所を与えていただきました。ただ古い水路跡が用地の中を通過しており、この問題をいかにクリアーするか、難しい課題が与えられておりました。禍（わざわい）転じて福となすじゃありませんが、「ビオトープ」として整備することができております。

園舎からは太平洋を望むこともできますし、保育園の名前としております、尾鈴山の山系の一部も仰ぎ見ることができます。（落成式の後の祝宴の中で、私は

職員たちを意識して次のようにも話しておきました。

皆様、先ほどから園の内外を見ていただいたことと思いますが、東側の2階の0歳児室からは、太平洋が見えます。保育士は、毎日海を指差しながら、「あの海のむこうには何があるんだろうね。行ってみたいね」と呼びかけなければなりません。そうすれば坂本竜馬のような人間が育つのかもしれません。

また西側には、尾鈴山系が見えます。あの山を指差しながら、保育士は、「あの山のように大きな心を持った人間になりましょうね」と子供たちに呼びかけるのであります。西郷隆盛は、毎日桜島うい見上げながら成長しています。きっと、「あの山のように大きく強い人間になろう」と鼓舞した人がいたのだらうと思います。)

次に「家族主義」であります。保育園は利用していただいている、それぞれの家族の皆様を支えていくための施設であります。お父さんお母さんが安心して働いていただけるように、大切なお子さんをおあずかりし、できるだけ家庭的環境を保育園の中でも維持できるように保育してまいります。これは友愛社独自のルールであります。保育士は「先生」とは呼びません。「お姉ちゃん」であり、「おばちゃん」であります。これも「家族主義」から来ています。できれば3人目4人目を生んで、この保育園で育てたい、そう御父兄の皆様にも思っただけのような保育をめざします。

3番目は「友愛主義」であります。先ほどの理念の中の「人は皆同胞」という言葉に重なります。つまり、人類の歴史を振りかえるならば、子供は若い夫婦だけの人的環境の中で育つのではなく、年令の高低を越え、障がいの有無を越えた人的環境の中で育って来たのであります。すなわち、保育園の中だけに子供たちを閉じこめてはならないのであります。特にこの地域のお年寄りや住民の方々との触れ合いが大事であります。また隣にあります小学校との連携も大事であります。

4番目に「自律主義」を掲げております。自分で自分を律するという意味です。この方針は、東北震災以降に新たに加えました。東北の方々が家族を失い、家を失った状況の中で、じっと我慢し互いに譲り合い助け合っている姿は、世界の人々を感動させました。自分で自分を律する人間に子供たちを育てていかねばなりません。そのためには、職員がまず模範を示さねばならないわけですので、職員教育も徹底してまいります。

お別れの言葉

松岡のおじさんと今日は呼ばせてください。昨夜の通夜では、正直驚きました。

90 歳のお年寄りがと言っちゃ失礼ですが、あんなに多くの若い保母さん達の心をつかんでいたとは予想してなかったのです。その人の価値は、その人が亡くなった時に決まると、どこかで聞いたような気がします。こんなに若い人達を多く集めれるのは、おじさんの生前の人徳のなせる技です。松岡のおじさんの人生、最後まで輝いていたんですね。この 20 年間、みごとなボランティア人生でした。

私がボランティアをお願いしたのは、ちょうど 20 年前です。石井記念友愛社の後援会「石井十次の会」（その当時は「友愛社を支える会」）を立ち上げようと決意した時です。設立発起人の一人に加わっていただきました。私も 40 歳半ばになっておりまして、石井十次記念のこの事業のそれまでの殻を破るべき時だと考え、支援の輪を作り始めたのです。

しかし、当時私の人脈も乏しく、特に母方の親族財津家の皆様に助けを求めました。皆様心よく馳せ参じてくださり、どれだけ心強かったことか。

私達は社会福祉法人という組織の中で福祉の仕事をさせていただいております。福祉の仕事と言うと聞こえはよいのですが、実態は行政の出先機関的な存在であり、わざわざ後援会など作らなくても事業はやっていけるのです。私はその次元に甘んじてはならないと考えたのです。

石井十次が 1 万人の後援会員を集めておりましたが、私もその世界に挑戦したいと考えました。本来の福祉とは、人々の心の和であり輪であり環であります。石井十次にはとてもかなわないけど、本物の福祉をやるためには、人々の心の和・輪・環を作ることに挑戦しなければならないのであります。

現在の福祉事業はその運営費のほぼすべてを国に頼っていて、割り切ってしまうえば、職員たちは単なるサラリーマンとなってしまいます。そこにボランティアの方々が加わることによって、本来の福祉の姿をイメージしていくことができます。本来の姿とは、石井十次の「天は父なり 人は同胞なれば 互いに相信じ 相愛すべきこと」の世界の姿です。

松岡のおじさんは、この 20 年間、我が石井記念友愛社の若い職員達に、福祉の本来の姿を示し続けて下さいました。

一つは石井記念につきん保育園の学童保育ボランティアであります。小規模児童養護施設「じゅうじの家」の子供たちとも交流して下さいました。子供たちに「おじいちゃん」としての姿を示し続けて下さいました。

二つ目は、お年寄りデイサービスでの詩吟ボランティアです。

さらに、石井十次資料館の案内ボランティアもやって下さいました。資料館のパンフレットはおじさんが中心となって作って下さいました。

他にも、後援会通信の毎月の編集作業や発送作業、大学研究者達の資料発掘の

お世話等、そのボランティアは多岐に渡ります。

松岡のおじさん、ほんとうにありがとうございました。「石井十次の会」も設立してちょうど 20 年がたち、世代交代の時期を迎えております。設立当時から色々と助けていただいた方々の恩にむくいるためにも、この節目を前向きに乗り気っていかねばなりません。昨夜は、息子さんの重企さん、宏さん、智（さとし）さん三人とお話することができました。おじさんの心はしっかりと引き継がれていると感じました。御安心ください。安らかにお眠りください。